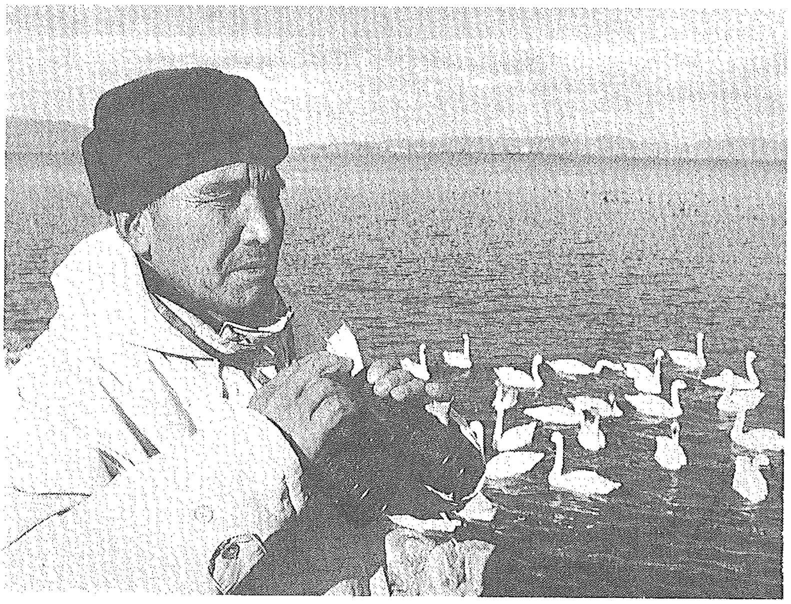
紙碑　門脇益市氏

山　本　良　征

平成２年７月22日，中海の『白鳥おじさん』門脇益市氏が亡くなられました。中海の白鳥は，長い間の保護活動の結果，平成になって永久的な保護区域が設けられることに決定された矢先であり，長い間の肩の荷を下ろされて安心された上で永眠されたことと思います。

昭和40年に２年がかりの餌付けが成功。当時，白鳥が餌付けに全く慣れてなかったこと，自然保護思想などなかったこと，などを考えるとそのご苦労は相当なものであったと思われます。当時の様子をよく奥様より聞かされましたが，「朝，仕事に行くと言って弁当持って出掛けたのはいいが，会社には行かず一日中海岸に腰掛けては沖の白鳥とバックの大山の雄姿に見とれていた。そのうち自分の弁当を撒き餌にし始め，弁当だけでは何とも足りずバケツを持って近所に茶ガラや残飯を貰いに歩き回る始末」とのこと。家族より乞食の真似など止めるよう強く要求されたことは当然のことですが，とり憑かれた男の耳にはもはや止まることもなく，ひたすら「大山をバックに自然の白鳥が我が手から餌を食ってくれる」ことを夢見ながら歩き始められたようです。

中海の白鳥は，干拓事業と切り離せない関係にあります。干拓するためには，まず周囲を堤防で囲み，立ち入り禁止区域とするため最高のサンクチュアリが出来上がります。そして徐々に干陸化されて最終的には白鳥の居場所もなくなる完全陸地となりますが，中海の白鳥はこの隙間を縫うようにして分散し



写真：山陰中央新報社提供

〒683　米子市荒園町104－1

ながら転々とジプシー生活を送ってきたことになります。そして最終の地であった彦名干拓地でやっと30ヘクタールの水面が白鳥のために残されることとなったところです。このジプシー生活の中で大きな危機を迎えた時期がありました。白鳥海岸の全盛期に塒としていたすぐ西側の干拓地が干陸化されてしまったのです。島根県の野鳥研究第一人者の故根岸啓二氏と門脇氏が再三に亘って県・農林省に対し白鳥が生息出来るだけの内水面を残すよう申し入れられましたが，努力の甲斐なく干陸化されたのです。丁度その頃他に適当な干拓地もなく，白鳥たちは陸続きの海岸で夜を明かさざるをえません。もう，いつ白鳥海岸を見捨ててもいい状況が続いたのですが，この危機を乗り越えたのは，白鳥たちの白鳥海岸への愛着心以外の何者でもなかったように思われます。もし，この時白鳥海岸を見捨ててしまっていれば中海そのものから白鳥たちが姿を消したであろうことを考えますと，白鳥海岸，すなわち氏の功績に改めて敬意を表するところです。

毎年のことながら，北帰行の時期になりますと，一緒にシベリアに行きたいと潤んだ目で空を見上げておられた氏の姿が思いだされます。多分，これからは氏の魂は白鳥とともにこの出雲の国と遙かなシベリアを永遠に往復されるのではないでしょうか。